

翌日、山口は責任者会議の席に着いていた。会議に出席している者は、上井施設長、澤田事務長のほか、各職種の主任達であった。会議は次第どおり進み、各議題がひととおり討議された後、進行役を務める三階介護主任の羽山洋子が参加者に対して議題以外で討議するものがあるかを確認したとき、山口が手を挙げた。

「ひとつ検討してもらいたい事があります。それは利用者と話し合う場を定期的に設けてみたらどうでしょう」

「話し合いの場？　いったい何を話し合うと言うのですか」羽山が言った。

「ここの生活についてです。私達は利用者が望む生活、満足できる日常を提供することが使命です。それを実践し、達成するためには、利用者の思いを聞き取ることが必要です。その為に利用者と話し合う場を設ける」

山口が話した後、沈黙が流れた。皆が山口の提案した内容をそれぞれが頭の中で整理していた。

「それって」羽山が沈黙を破った。「現場職員は日々やっていませんか。利用者と接し会話する中で利用者から出てくる希望や不満を聞けば、それを受け止め、それに対して対応をいませんか」

「ええ、確かにそうです。それは今後も引き続きお願いしたい。しかし、それだけでは不十分な気がします。利用者から意見を聞いて、それを施設が検討する。施設が検討するのではなくて、利用者と施設が共に考え、話し合って作り上げていくことが望ましいと思いませんか。ここで生活しているのは我々じゃない、利用者です。主体者である利用者が話し合いの場にいない状況で決められてしまう。これで利用者は本当に満足しているのでしょうか、意見を言える機会がなく決められてしまうことに納得しているのでしょうか」山口はいったん話すのをやめて、テーブルを囲んでいるスタッフを見渡した後に話を続けた。

「今後、介護サービスを利用する高齢者とこれまでの高齢者とでは大きく違う点があります。それは我慢と主張です。今までの高齢者は自分の思いを我慢して口に出す方は少なかったが、これからの高齢者は自分の思いを我慢せずにしっかりと主張するでしょう。その違いは今まで生きてきた社会環境です」

「それはさあ」澤田が言った。

山口が澤田に目を向けると、澤田は一笑に付すかのごとく笑みを浮かべていた。

澤田はその笑みを崩さずに言葉を続けた。「単なる性格じゃないの。戦争を経験したとか日本を復興させた自信を持っているなんて、私からみれば考えすぎと思うね。それになに

か理想論っぽく聞こえてしまうね。利用者の望むことを全て聞き入れるなんてできるの。わがままな利用者の勝手気ままな要求を二つ返事で受け入れてしまうの。大丈夫？ 施設はボランティア団体じゃない。まさか利用者の好感度を上げるためのパフォーマンスじゃないよね」

周りの職員の視線が山口に向けられた。職員達は澤田が見せる薄笑いが、まるで山口を挑発しているかのように感じられ、山口の反応を固唾を呑んで見守った。

山口は澤田の挑発とも取れる言葉に対して冷静な態度を見せた。「確かに全ての希望を実現できることは難しいでしょう。ただ初めから無理と決めつけるのではなく、望むものをどのようにすれば可能になるかを利用者と一緒に考えていくことが大事です。施設での生活環境を施設サイドの目線ではなく、利用者目線で受け止めることが大事です」

澤田の顔から笑みが消えた。「利用者目線も結構。だが言うまでもないが、コスト度外視は論外。それは当然分っていますよね介護長。利用者の希望に対して何でも受け入れ、その度に施設の金が出て行く。施設の金を湯水のように使われては困りますよ。まあ、皆が賞与もいらないと言うのなら話しは別だがね」

会議室は二人の静かな口争いのようなやりとりにより、他の職員は誰も口を出さず黙っていた。へたにどちらかの意見に同調するようなことを言えば、同調されなかった相手からの矛先が自分に回ってくる危険を感じていたのである。

山口が自分を見つめる佐藤主任と目が合ったときに、彼女の視線に違和感を覚えた。山口は業務優先主義と思っていた佐藤主任の自分を見つめる視線は否定的なものと思っていたが、自分に向けられた視線からは否定的な一面は感じられず、何か自分を探るようなものを感じられた。

やがて佐藤は目をそらした。

「昨日」山口は佐藤を見ながら言うと、視線を澤田に向けた。「二階の食堂で利用者が強い意志をもって訴えることができました。それによって今回の提案をだしたことでもあります」

「何を訴えたの」澤田が言った。

山口は昨日食堂で起きた一件を話した。その話を澤田は眉をひそめ口を真一文字にしながら聞いていた。山口の話が終わると口を開いた。「その利用者は誰」

「小久保さんと藤田さんです」

「小久保と藤田……藤田？」

山口はうなずいた。澤田はなにも言わず山口から視線をそらすと、テーブルの一点を見つめた。山口には澤田がなにか思索しているように感じられた。そして澤田の口が声には出さないが、何かを発している動きを見せた。山口はそれを見逃さなかった。しかしなにを言っているのかは分らなかった。

澤田は山口に顔を向けると言った。「そんな演説ぶった利用者達がいる状況で話し合いの場を作る？　なおさらどうかと思うね」

「いえ」山口が言った。「だからこそあったほうが良いかと思います。再度言いますが小久保さんたちは生活の改善を訴えていました。もし話し合いの場があったら、小久保さんたちはあのような真似はしなかったと思います」

澤田が鼻で笑った。「もっともらしく聞こえるけどそれは認知症だからでしょ。認知症だから急に食堂でわめきだしたんじゃないの、認知症の人と話し合う……時間の無駄に思うけどね」そう言うと、背もたれに寄り掛かった。「認知症の人は人の世話がなければ生きていけないよね。身の丈に合った生活をすべきだ」

山口が反論しようとしたとき、佐藤の声が遮った。

「その言い方、差別的に感じます」佐藤は感情をにじませて言った。「それに時間の無駄とは思いません。認知症の方は自身が抱く感情を相手に上手く伝えられないだけです。認知症になったからといって、その人の人間性は何ら変わっていません。それに小久保さんと藤田さんは認知症ではありません。入院していた病院からの診療情報にも認知症状はないと記載されていました。また私達は認知症あるなしに関係なく利用者一人ひとり平等に話しを聞き、真摯に応えます。いえ、応える義務があります。それが介護福祉士です。また相手の訴えを拒絶することは、相手の存在を認めていないことになります」

山口は佐藤の話を聞いている途中から、顔に笑みが浮かび始め、話が終わるとちいさくうなずいた。いいぞ！　彼女の知識や伝達力、そして介護観に不安は感じられない。しかし、山口はすぐに緩んだ口元をすぼめ、疑問を感じ始めた。でもどうだろう、その思いを現場で活用できているとは思えない。なぜだ……山口は以前彼女が言っていた言葉を思い出した。あなたが言っていることは理想論です。そういうことか。彼女は日々繁忙な業務によって、介護職本来のあるべき姿が実践できないと感じ、諦めの選択肢を選んでしまい、その武器を引き出しに収め鍵を掛けてしまったようだ。

澤田は佐藤の話を冷めた目で聞いていたが、佐藤が話し終わると再びあのいやらしい笑みを浮かべた。「まあ、現場職員が利用者とおしゃべりしたいなら、どうぞ好きなだけやっ

てください。しかし」澤田の顔からあの笑みが消え、冷めた表情に変わった。それは人間味を感じさせないものだった。「施設運営に関わるような話し合いに利用者を入れることに、今すぐイエスとは言えない。しっかり検討する時間が必要だ」

「では、話し合いの場を開催する方向で詳細を煮詰めていきます」山口が言った。

「そうじゃないよ」澤田が感情を交えながら即答した。「見方によっては現実離れした提案に感じられるし、そしてこのやり方が施設の収益にとって建設的なものを感じられないから、すぐに答えは出せないと言っているんだ」

「しかし――」

「この件は保留にします」澤田は司会の羽山に顔を向けた。「羽山さん、これで会議は終了としよう。私はこれからやるべきことがあるんでね」そう言うと澤田は立ち上がり、ドアへと歩き出した。

澤田が退出したことにより会議は打ち切れ、皆が会議室から出始めた。

山口は会議室を出たその足で小久保に会うため、二階に向かって歩き出した。その足取りは重かった。山口の案は澤田により却下されたも同然だった。この結果を小久保に伝えると思うと、かなり気が重くなった。山口が大きくため息をついた時、背後から自分を呼ぶ声が聞こえ、山口は足を止めて振り向くと佐藤が近づいて来るのが目に入った。

「介護長、少しよろしいでしょうか」

山口はうなずいた。

「先ほどの会議で提案された件ですが、介護長が求めていることは分ります。しかし現実的にそれって実現できるのでしょうか」

「君も理想論のように感じているの」

佐藤は返事を少しためらったあとに言った。「正直に話していいですか」

山口はうなずいた。

「職員と利用者が膝を交えて話し合う環境、私も見てみたいです。それが現実になれば、小久保さんたちが食堂で起こしたような件は今後なくなると思います。しかし同時に話し合うことで出てくる様々な要求、そしてその要求を解決するための多くの課題が必然的に出てくるはずですよ。その課題を解決するために動くのは現場職員です。今、現場職員にこれ以上の負担を強ければ、やらされ感を感じ、形だけのものになる危険があります。正直、理想と現実の乖離を感じます。それに負担に耐えかねて辞めていく職員も……利用者の事を考えることは当然ですが、でも、介護長は職員の心情にも気にかけていただけてい

るのでしょうか」佐藤はもう二度と挫折感を味わいたくはなかった。「介護長の提案はとても共感できます。でも……」佐藤は次に続く言葉を心の中で言った。『もう一人にはなりたくない』入職当時の熱い想いが瞬く間に蹂躪され孤独を感じた自分。もし同じ思いを再び味わえば施設にいたることができるのだろうか。佐藤は思った。そうになったら私はもう耐えられない。佐藤の目に涙が浮かんでいた。

「佐藤主任」山口は穏やかな口調で言った。「俺は理想論者とは違うよ。確かに利用者から無理な要求もでるかもしれない。だからといって試みを諦めてはいけない。頭の中で、たられればばかり考えて行動に起こさないのは、結局何も考えていないと同じだよ。利用者だって納得できないだろう。まずは行動。そして上手くいかなければ、その次はどのようにしたら上手くいくのかを検討して再チャレンジする。今回の提案のようにね。確かにこの提案は成立しないかもしれない。しかしすぐに諦めてはいけない」山口は一旦話を止め、佐藤を見つめた。そして再び話し始めた。「佐藤主任、俺達の仕事は利用者がいてこそ存在価値がある。また俺達の存在は黒子と言ってもいいだろう。俺達は利用者が進む道が暗くなり見失いそうになった時、そっと道を照らす黒子だよ。主役はあくまでも利用者だ。俺達が目立ってはいけない。俺達は影から力を貸す存在だ。そして互いの関係は良好なものでなければいけない。利用者に信頼されなければ、いくら道を照らしても利用者は足を出さないだろう。利用者が俺達を信頼するからこそ足を前に出してくれる。信頼関係を構築することにより利用者との足並みが揃う。そう思わないか」

佐藤はうなずいた。しかし、その行動により疲弊してしまうリスクを伴う介護職員をどう考えているのかを口に出そうとした時に山口が話を続けた。

「両輪の轍だよ」

「轍ですか」佐藤が尋ねた。

「そう、我々と利用者は常に同じ方向に向かって進んでいる。両輪の轍のようにね。そしてその轍は何を意味しているのか。それは利用者が求める生活、いわば利用者のあるべき姿だ。そのあるべき姿を我々と利用者が協力して実現させた軌跡だよ」山口は一呼吸おいてから再び話し始めた。「利用者は本来のあるべき生活の姿から乖離した生活を送っている。ここでは施設が決めた生活の流れに合わせられ、自分なりの生活が入り込む余地がない。確かに施設の生活は集団生活であり、施設が決めたタイムスケジュールによって同じ生活になってしまうのは仕方が無いところもある。しかし利用者は心から納得しているのだろうか。未来に期待する笑顔が見られるかな。我々は利用者一人ひとりに対して、窮屈

な施設生活の中で可能な限り個々の本来のあるべき姿を再現できるよう動かなければならない。それを実現させるには利用者が我々に足並みを揃えるのではないよ。我々が利用者に足並みを揃えなければならない。それが両輪の轍となり、その轍が成功の軌跡となる。利用者は俺達に期待しているんだ。俺達が前に進まなければ利用者は誰に頼ればいいのか。それに応えていこうじゃないか。利用者が明日を考えた時に笑顔がでるようにしようじゃないか」

「利用者と共に施設を作り上げていくのですか」

「彼らの生活、いや我々と同じ生活を作り上げていくんだ。法人サイドが施設運営にあたり、しっかりと利用者の意見、どんな小さな意見でも吸い上げて利用者と検討していく。大変なのは分る。今以上に時間と労力が必要だろう。しかし俺達は介護福祉士だ。利用者の幸福の実現の為にこの資格がある。資格に恥じない行動を今こそ起こそうじゃないか。佐藤さん、あなたには豊富な知識と長い経験、実践を積んだ介護のプロフェッショナルだ。あなたが持っているその知識と技術は武器だ。その武器を惜しまず利用者と共に活用しようじゃないか。そして私は君や他の介護職員が利用者の為に円滑に働けるフィールドを構築していく。利用者の生活環境、職員の職場環境、双方の改革だ。それが介護長の使命だ」山口は笑みを浮かべた。「利用者と共に施設を作り上げていく。面白そうじゃないか。利用者が生きている今日に意味を持たせてあげようよ。さて、小久保さんの所に会議の結果を伝えに行かないとな」そう言うと、山口は歩き出した。

佐藤は小久保の名前を聞くと驚きのあまり目を見開いた。「もしかしてこの案は小久保さんからでたものですか」

山口は立ち止まると振り返って佐藤を見た。「会議の中で事務長に反論してくれたね。嬉しかったよ」そう言うと佐藤に背を向けて歩き始めたが、再び足を止めて振り返った。「そうだ、君は純喫茶を知っているかな。今度小久保さんから純喫茶の話を聞いてみるという」そう言うと口元に笑みを浮かべた。「何かを感じるぞ」山口は歩き始め、小久保の部屋に向かった。

佐藤は山口の後ろ姿を見つめ続けていた。彼女の心は迷い、自分に問いかけた。今の私、一度諦めた私に変えることができるの。もうあの時のような孤独を感じたくはない。でも今の私はフロア主任として現場職員を導く立場になっている。それなりに皆から信頼はされていると思う。今の私だったら……佐藤は山口の背中を見続けた。それに今は孤独じゃないかも。「両輪の轍」佐藤は小さく呟いた。山口が言ったこの言葉が彼女の心に抵抗

なく沁み込んでいた。

山口は小久保の部屋をノックし、ドアを少し開けると言った。「小久保さん、山口です。今、お話ししてもよろしいですか」

「ああ構わんよ」

「失礼します」山口は部屋に入り、肘掛け椅子に座った。

「で、私に話しでもあるのかな」小久保が尋ねた。

「先日、小久保さんと約束した件です。会議で提案しました」

「ほう。で、どうだった」

山口は小さく首を横に振った。「すみません、上手く説得できませんでした」山口は身構えた。期待どおりに進まなかったことを知った小久保の反応が気になった。

「そうか」小久保は静かに言った。「物事を変えるには時間がかかる。特にこれは一朝一夕ではいけないものだ」

山口は感情的にならず、冷静な口調で話す小久保を見て安心した。

「このスローガンを知っているか」小久保が言った。「連帯を求めて孤立を恐れず、力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽くさずして挫けることを拒否する」

「力尽くさずして挫けることを拒否する。いえ、知りません」

小久保はゆっくりと頷いた。「君はどうかな。もう挫けてしまったか」

「一度つまずいたくらいで、諦めはしません。そのスローガンは何です」

「全共闘が東大安田講堂で闘った際のスローガンの一つだ」

山口はしばらく小久保を見つめた後に言った。「それは、あなたが参加していた学生運動ですね」

小久保は大袈裟に目を見開いた。「そこまで調べあげているのか。まるで公安だな」

「いえ、これは利用者さんか聞いたものです」

小久保は鼻で笑った後に言った。「まあ、どうでもいい」そう言った後、小久保は表情を硬くした。「今後、途中で熱が冷めて他人事として諦めるなよ」

「当然です」そう言うと立ち上がった。「これからも途中経過を報告しに来ます」

「分った」

「では、失礼します」山口は一礼して部屋を後にした。

山口はドアを閉めると立ち止まった。山口は自分の意志に一抹の不安がよぎった。自分

の力量でこの施設に変化を生み出すことができるのだろうか。今は自分の思いを言葉だけで発信しているにすぎず、行動に起こしていない。

山口は軽くため息をつくと言った。「悩んでも仕方ない、やるだけやってみるか」

藤田が部屋でマウスに餌を与えている時、ドアをノックする音が聞こえた。藤田がドアの方へ振り向くと、ドアが開き、事務長の澤田が入ってきた。澤田は藤田を見ることもなく、部屋に入り藤田のそばで立ち止まった。

藤田は意外な訪問者に戸惑いを隠せないでいた。いったい何の目的でここに来たんだ。「自分らしい生活だと」澤田は唐突に吐き出すような口調で言った。

藤田の身体に緊張が走った。澤田の言葉に困惑を隠せないでいた。

澤田は藤田に顔を向けた。その目は冷たく、藤田を見下しているようだった。「滞納者が何を言ってる」

「滞納？」藤田は理解できなかった。「いったい何のことだ」

「四ヶ月も利用料金を支払っていない。メシ屋で言えば、食い逃げだな。どうだ、ただ飯の味は。さぞかし美味いだろうな」

藤田の目が大きく見開いた。「そんなはずはない。何かの間違いだ」

「事実だよ」澤田は肘掛け椅子に腰掛けた。「困ったもんだ」

「何か理由があるはずだ。きっと何かの事情で支払いが遅れているんだ」

「ほう」澤田はそう言うと言と身体を前のめりにした。「じゃあ教えてくれ、その理由は何だ。理由があるなら、連絡を入れるのが常識だろ。こっちは何度も連絡しているにもかかわらず、捕まらない。おまけに向こうからの連絡は一度もない」澤田は身体を起こし、背もたれに寄り掛かった。「まじめに料金を納めている人はどう思うかな」

藤田はうつむき、何も言い返すことができなかった。

「自分らしい生活なんて吠えてるけど、その前に世話になっているのに金を払わないって、人としてどうなのよ」澤田は勢いよく背もたれから離れ立ち上がった。「それにな、滞納されるとまるで俺がなめられているように感じてムカつくんだよ。俺の業績の足を引っ張りやがって」そう言うと言とズボンのポケットから施設内用 P H S を取り出した。「俺は前の事務長とは違うからな。俺を甘く見るなよ」澤田は P H S で二階サービスステーションに内線をかけて、佐藤を呼び出した。P H S を切ると、P H S をポケットに収めながら吐き出すように言った。「盗人たけだけしいのもほどがある」

佐藤が部屋に入って来た。「何でしょうか」

澤田はケージに入っているネズミを指した。「あそこにいるのは何だ」

「藤田さんのネズミです」今更何を言っているの。

「主任、なぜネズミがこの施設にいるんだ」澤田は芝居かかった口調で尋ねた。

「だから、そのネズミは――」

「処分しなさい。ステーションに持って行って」

「何だと！」藤田が思わず大声で叫んだ。

澤田が勢いよく立ち上がった。「料金滞納四ヶ月、このネズミもただ飯食っているんだろ。食い逃げの常習犯だ」そう言うと澤田は佐藤に顔を向けた。「衛生的に良くない。万がいち他の利用者が噛まれたら大変だ。すぐに処分して」

藤田は澤田を睨みつけ、唇は怒りで震えていた。

「でも」佐藤は躊躇した。何もそこまでしなくても……。

「早くしなさい」

佐藤はケージを持ち上げた。藤田の顔を見ると、藤田の目に涙がにじんでいるのが分かった。「ごめんなさい」

「なに謝っているんだ」澤田が佐藤に言った。「こっちが謝ってもらいたいくらいだ」

佐藤が部屋から出て行った後に、澤田が藤田を見下ろした。「滞納が続いたら、出て行くのはネズミだけじゃないぞ。覚悟しておくんだな」澤田はそう言うと鼻で笑った。「家族から見放され、施設から追い出され、行く当てもなくなる。どうする、いっそのことお前の好きな野ネズミがいる下水道の中で暮らすのも悪くないかもな」そう言うと澤田は歩き出し、ドアを開けて部屋を出て行った。ドアは開けっ放しだった。

ステーションに入った佐藤は、ケージを隅に置いた。

ステーションにいた鈴木がネズミに気がついた。「あれ、そのネズミ、藤田さんのですよ。どうしたんですか」

「やりすぎよ」佐藤は小声で吐き出した。

その時、ステーションに澤田が入ってきた。「いいことを思いついた。主任、バケツはあるか」

「バケツをどうするんですか」感情のない口調だった。

「バケツにあのネズミを入れて、ケージを返す。空のケージを見せるのもいい」澤田はいやらしい笑みを浮かべた。「ねえ、そう思わない？ ねえ」

佐藤は返事も、うなずきもしなかった。

藤田は澤田が出て行った後、全く動くことができなかった。顔はうつむき、視線は床を見続けていた。ショックがあまりにも大きく、何も考えることができなかった。家族が滞納していたショックもそうだが、一番の衝撃は家族同様だったマウスが連れ去られ、処分されることだった。

藤田は空いたままの部屋の入り口に人の気配を感じたが、振り向く気力はなかった。やがてその気配は自分のそばまで近づき止まったのを感じた。

「お待たせ」澤田の声だった。

藤田はうつむいたまま床を見つめたままだった。

「ほれ」澤田が手の持っていたものを藤田が見つめている床に置いた。

藤田の目が大きく見開いた。それは空のケージだった。藤田は震える手で丸眼鏡を外した。藤田の心は澤田により蹂躪され、完全に崩れ落ちてしまった。

「哀れなものだな」澤田が言った。「身内から見捨てられ、大切なものまで奪われる」そう言うと大きくため息をついた。「俺だったら人生を終わりにしたいくらいだ。そうだ、あんたの情報を見たよ。脳梗塞を発症するもっと前、大学時代の頃のあんた、自殺未遂で入院してたんだな。自ら命を絶とうとしても失敗に終わる……その頃からお前の哀れな人生が始まったのか」

藤田は憔悴し、ただ黙っていた。

「俺が救いの手を差し伸べよう」そう言うと澤田はポケットから太い紐を出し、藤田の膝の上に投げ落とした。「これから先、どん底の辛い思いをしながら生き続けることから解放されたらどうだ。これを使えばもう悲しい思いをしなくて済むし、この部屋が空けば新しい利用者が入れる。しっかり金を入れてくれる利用者がな。お互いにとっていいことだ」

藤田は黙ったまま紐を見つめている。

「それとも」澤田が言った。「利用料未納でここから追い出されて、ドブネズミのように生きていくか。まあ、それもいいだろう。お前はネズミが好きだからな」そう言うと澤田は部屋を出るために歩き出した。途中足を止めると藤田の方に振り向いた。「さっさとやれ」

澤田は部屋を後にした。